掲載日:2020年06月02日,面名:S306X0,記事ID:K2020060200000008200 (C)河北新報社

東北大グループ

神経損傷の仕組み発見

難病の治療法開発の可能性

東北大大学院医学研究系研究科の三須建郎講師（神経内科）らの研究グループは、脳や脊髄の神経細胞が傷つき、手足のしびれなどが起きる多発性硬化症（ＭＳ）などの難病について、疾患を引き起こす新たな仕組みを発見した。これまで困難だった治療法の確立につながる可能性があるという。

研究グループは、神経を覆う髄鞘（ずいしょう）と呼ばれる膜にあるタンパク質の一種「ＭＯＧ」に着目。免疫の異常でＭＯＧに対する抗体ができ、髄鞘の一部が失われ、神経細胞が傷つく仕組みが明らかになった。

東北大病院など全国９施設で２０１４～18年、ＭＯＧ抗体反応が陽性だった難病患者11人を対象に分析した。いずれも診断目的で脳から一部組織を採取して調べた。

ＭＳなどの難病患者は国内に３万人近くいるとされる。症状や神経細胞の炎症の特徴が典型的なＭＳと異なるケースも確認されていたが、詳しい原因は分かっていなかった。

三須講師は「ＭＯＧ抗体のある難病患者は、国内だけで３０００～５０００人程度いると見込まれる。治療法の開発を目指し、病状の改善につなげたい」と話している。